座学を活用した体育授業の実践報告

学籍番号199310
氏　　名　荻原　徹
主指導教員　赤松喜久　先生

１．背景

教職大学院生として保健体育分野の研究を行う際に,まず現在の学校体育での課題を考えた.新学習指導要領保健体育編第一章第二節では「習得した知識や技能を活用して課題解決することや，学習したことを相手に分かりやすく伝えること等に課題があること，運動する子供とそうでない子供の二極化傾向が見られること，子供の体力について，低下傾向には歯止めが掛かっているものの，体力水準が高かった昭和60年ごろと比較すると，依然として低い状況が見られることなどの指摘がある。また，健康課題を発見し，主体的に課題解決に取り組む学習が不十分であり，社会の変化に伴う新たな健康課題に対応した教育が必要との指摘がある。と書いており,学習を通したコミュニケーション能力の低さ,運動意欲に子供間に差があることや,体力水準の伸び悩みが課題として挙げられている.私はこの課題解決に向けて,生徒が運動をきちんと理解すること,運動に主体的に取り組むことが求められていると考え,主体的姿勢の涵養と運動理解に焦点を置いて授業作成と授業研究を行うこととした。また，現代社会では国際化や情報化が休息に進んでおり，ICT 端末機器なども生徒一人一人が所持しているような時代になっている。これらも活用して，時代の変化に対応した体育授業のあり方について考えていく。

2.発展課題研究　-主体的な体育授業を目標として-

2-1 授業実践方法

体育実技の授業では,基本的に運動を行いながら教員から学習の内容や種目のルール等の説明を受ける。」そのため,教員から伝えられた内容を集中して理解する時間がなく,運動を行いながら覚えることになってしまう。運動有能感の高い子供であれば,運動を行いながら理解することは容易であるかもしれないが,運動有能感が比較的低いと感じられる子供にとっては，運動を行う中で基礎的な技術や知識を理解することは到底難しいのではないかと考える。そこで本授業では,運動についての技術や知識についでの理解を深める座学を行い,運動の知識や技能について,座学であればきちんとクラス全体が理解する事ができ

るのかをアンケートを用いて検討することとした。また,生徒の運動意欲という観点から,運動意欲を運動へのモチベーションとして本研究では考え,熟練者の映像を運動の直前に見せる事がモチベーションの向上を促し積極的な運動参加を及ぼすのかどうかについても検討をすることとした。本授業の指導案は図 4 に示している。授業観察による生徒の活動の分析は ALT-PEの測定方法を利用して行うこととする。

2-2 授業実践結果

運動のルールについて理解できたかどうか，魅力を感じたか，のそれぞれの質問項目に関して肯定的な回答をした生徒がどちらも全体の 70%を上回っており，座学を用いて運動の知識や技能を学習することが，多くの生徒が理解できやすい傾向にあることをしめしている。しかしながら，取り組みたいかどうかについては，ラグビーの競技特性の影響もあり恐怖心を感じ，全体的に意見のばらつきが見られた。また，運動前に熟練者の映像を見る事が直接生徒のモチベーションになるかは本研究では解明するに至らなかったが，熟練者の映像が生徒にとって運動の様子を明確に示す学習教材となり，ゲームでの動きが積極的であり，直接的に運動に従事している回数が多い傾向にある事が示された。

まとめ

本実習では,今日学校体育が抱えている課題,目標と実習校での体育授業の様子を照らし合わせて,生徒が主体的に参加できる体育授業の開発,実践を行なった。本実習校の生徒は,今まで自身が経験のしたことのない生徒観であり,運動に対して消極的な態度である事が多か った。また,現代の子供に多いのかもしれないが,SNS でコミュニケーションをとる事が多くなったことも要因の一つとして,面と向かってのコミュニケーションを苦手としている生徒が多く,体育でも他者とコミュニケーションを取りながら活動する事が苦手な生徒がいることや,教員に質問を投げかける事が少ないように思えた。そのような生徒にも運動に主体的に取り組んでもらい,体力の向上,生涯にわたって運動,スポーツを活用して豊かな生活を営む能力を育む必要がある.これらを実習校で実現するためには生徒観にあった授業実践を行う必要があると考え,授業実践を行なった。ICT を活用した授業実践は本実習校では時期尚早であるという結論に至ったが,ICT を使った教育は推進されていくべきであり,生徒も教員もICT 活用の授業は徐々に取り入れていきながら慣れていく事は必要である。全国的に ICT 機器等を活用した教育は推進されてはいるが,学校ごとに環境の整備状況の差は大きく,本実習校のように教員が自ら ICT 機器等を揃えなければ実現不可能な場合もある。このようなICT 機器の環境による受けることのできる教育の格差をなくしていく事も今後の課題として考えていかねばならないと感じた。